

文化

を抄録したものではないかと思われる。それはともかくとして、キリスト教の牧師がもじもじ日本古来の伝統儀礼である新嘗祭に触れているところ興味がわく。
植村は、その冒頭で、「タダヤにては地の産物を感謝する祭り、一年に二度あり。……この国民は時々に神の御工（みわざ）の美りによって飽き足らぬを感謝する祭りを行ひ



富士見町教会牧師 時代の植村正久

な ら 民俗通信

34 西村 博美

卷之三

1

期の牧師が「説教」

たる。……これ美しき日本也。あらずや。日本にも古来かかる祭り少なからず」と記している。

仰をもつて、新警察を最も健全な意味において祝するよう、
にせねばならぬ」と、植村は
説いてゐる。

（もちろん）、植村が説くのは、キリストの神である。しかし、それは教会堂において、

が、一派後の新嘗祭社挙行において」と題された説教（1923年）は、いわば「平時」のそれとは大きく事情が異なる。

も、初午（はつうま）の口占（くちあ）いが、穴守（あなもり）でなく、いん陽（いんよう）でなく、な祭り（なまつり）をなし、子どもも大騒ぎ（おほさわぎ）している。……随分弊害（ひがい）が多い習慣（くわうせう）もあったことであつた。キリスト者は、眞実（しんじつ）の信（しん）ぎをしてゐる。

意味で礼拝すれば活きて来
し、……新穀実ったといふ悦
びも、こうじうじことを考える
と。 植村は、時にこのように國
の祝祭日にならんで説教をさ
せた。 植村正久の富士見町教会で
は、毎年11月23日前後には、
新穀祭の礼拝が行われていた。

植村正久と「新嘗感謝」

バルの礼拝とは色々の転写法（あつれき）があった」と述べている。カナン人は、ヨルダン川以西に住んだ諸族だが、ここでは少しその説明が必要だろう。

日本的なキリスト教

ユダヤ教の教えを母胎とする。また、イスラエル民族の発祥は、ヨーフラテス河の下流域であつたとされるが、西に南へと移動を繰り返しながら、族長モーセの時にエジプトから「約束の地」カナンへと導かれた。やがて、安住に

「シジトの國から導き出されたり、彼らを仮庵に住ませせたい」と、あなたたちのばあや人々が知るためである。わたしはあなたの神、ナニヤーである」（レビ記、二十三章）

じつじつと実感快である。折
口せ、「神上^{じんじや}の祭^{まつり}をする
為了に請^{うけ}ひ降^りした神を、家^{いえ}に迎^{むか}
へる物事^{もの}」と新嘗祭^{しんじょうさい}の
もつとも肝要^{かんよう}な部分^{ぶぶん}であった
ところ。即ち、新嘗^{しんじょう}の語^ごのも
じゆる「くじなん・くじなん」
は、「くじなん」(嘗^しの語^ご)

「新舊祭」という古來の農耕慶祝儀式に触れたこのよくな植村博士の説教によつて、我が國最初期のキリスト教の信仰が異教とのこの地に、緩やかに根付きはじめていったのではないで、うづか。(二)しむらひろみ 詩人・

「(我が国) 農民や町人の中にも、厳格な自らの唯神から離れて、農耕の農業者も現れる。」

「今年は、大水があった。幸運にして餓えや寒さに堪えられぬで居る。……自然の力で、日が照り、雨が潤し、これがために五穀が成就する。……我々は感謝するために集まつた。この稻が実つたことを喜ぶにつけて、神に恩恵を感謝

たとしている（一種みのらの蔭にて」1916年）。

奈良民俗文化研究所研究員
「次回は5月30日付」